

## 19年度発掘調査遺跡の紹介

### ながわり 長割遺跡

(村上市大字下相川字長割307ほか)

遺跡は三面川の支流、<sup>もんぜんがわ</sup>門前川右岸の自然堤防上に立地しています。標高約18.0mで、周辺の水田・畑との標高差は2m未満と比較的低地に立地します。日本海沿岸東北自動車道の建設に先立ち、平成19年4月から発掘調査を開始しました。縄文時代後期前葉の大規模集落で、上下2面で遺構を確認しました。発掘調査面積は延べ10,370㎡(5,185㎡×2面)です。発掘調査は2か年計画で、今年度はその1年目です。上面と、一部で下面までの調査を行いました。

主な遺構には、平地式？建物8棟、掘立柱建物3棟、石<sup>へいちしき たてもものほったてぼしらたてもものいし</sup>囲炉(写真1)17基、地床炉35基、埋設土器10基、配石遺構などがあります。平地式？建物としたものは、石<sup>がこいろ</sup>囲炉・地床炉を中心に柱穴が円形に配置されています。石<sup>いこう</sup>囲炉・地床炉を中心にして柱穴が円形に配置されています。縦穴<sup>たいあな</sup>住居のような掘り込みが見つからないので、平地式？建物としました。炉の存在から、来年度の調査によって更に建物の数は増えると考えられます。

平地式？建物の柱穴が直径20cmほどであるのに対し、直径が40cmを超える大型の柱穴が多数見つかります。中には直径が約1.6m、深さが約1.5mと特に大きな柱穴もあります。平面形が長方形の掘立柱建物の柱穴と考えられ、現状では3棟を確認しました。これも、今後の調査で更に数量は増加すると考えられます。

遺構配置から集落の形態は、建物がドーナツ状に配置された「環状集落」です。平地式？建物の分布範囲＝<sup>きょゆうき</sup>居住域は約140mにも及び、この規模は県内で確認された縄文時代のムラでは最大級です。評価が定まらない遺構もありますが、来年度の調査でこのムラの状況がより鮮明になると考えています。

見つかった遺物は800箱を超えます。このうち、大珠といわれるペンダント(写真2)や、自然礫に細い線で模様が描かれた線刻礫(写真3)がそれぞれ1点出土しており注目されます。大珠は長さ約10cmと大型です。線刻礫は弧線が連続しています。(滝沢規朗)



写真1 石囲炉



写真2 大珠



写真3 線刻礫

きつねづか  
狐塚遺跡

(阿賀野市大字熊居新田字狐塚742ほか)

狐塚遺跡は新潟県北東部に位置し、阿賀野川により形成された沖積地上に立地します。遺跡からは東に五頭山、西に弥彦山、北に広大な越後平野を眺める事ができます。国道49号阿賀野バイパス建設工事に伴い、平成19年10月～12月にかけて行った調査で、弥生時代中期後半（紀元前100年ころ）と鎌倉・室町時代（12～14世紀）の遺跡であることが分かりました。

中でも注目すべきは9基見つかった弥生時代の土坑（写真1）です。土坑は平面形が楕円形のものが多く見受けられます。中から小型の壺、甕、鉢、蓋が見つかり、割れや欠けがほとんど見られない土器もありました。また、あたかもその場に据えられていたかのようにして見つかったものや3～4個体が直線的に並んだ状態で見つかった事例（写真2）もありました。土器を詳細に観察すると、日常使用するものに比べ小型ですが、ていねいなつくりで文様も精緻に刻まれているものが多いことが分かります。

これらの土坑は土坑墓（地面に穴を掘り遺体を埋葬したお墓）の可能性が高く、土器（写真3）は副葬品と考えられます。科学分析の結果や他遺跡の事例との比較検討を踏まえ、今後明らかにしていきたいと考えます。

弥生土器の形や文様は多種多様です。そこからは北陸地方や東南北部・北部の土器様式が多様に融合している様子が観察され、当時の人々の交流を物語っています。

(杉田和宏)



写真1 土坑墓集中区域(北東から)



写真2 一直線上に見つかった土器(北東から)



写真3 墓の副葬品と考えられる小型土器

## でんごくらくじあと 伝極楽寺跡

(糸魚川市田伏字高畑1175-1ほか)

伝極楽寺跡は、糸魚川市を流れる早川の左岸に展開する金山に連なる丘陵の裾部に立地しています。糸魚川東バイパス建設に伴う調査の結果、鎌倉時代(12~14世紀)と室町時代(15世紀)の小規模な集落であることがわかりました。山際に数軒の建物を建てて生活していた様子をうかがい知ることができます。遺跡は、標高が17.5m(上段)と14.5m(下段)の2つの平坦地にまたがっています。

調査区中央の上段と下段の境には、写真1のように高さ2mもの石垣が組まれており、上段は方形に区画されていました。そのため、調査開始以前には、この場所に文献に記された中世の「極楽寺」があったのではないかと考えられていました。その石垣を断ち割って

調査したところ(写真2)、石垣の裏込め土砂内や、石垣より下位の層から江戸時代後期の伊万里焼などの陶磁器類が出土しました。このことから、上段の方形区画と石垣は、江戸時代後期以降に造成されたものとわかりました。上段の平坦面を詳しく調査しましたが、平坦地には建物などの痕跡を確認することができず、今回の調査範囲内からは明確な「極楽寺」の痕跡を確認できませんでした。

下段では、幅13.0m、深さ1.7mにもおよぶ鎌倉時代の沢が見つかりました。内部は土砂で覆われており、度重なる土石流で埋まったものと考えます。室町時代の頃には完全に埋没し、平坦地となったため、その上に溝や土坑などの遺構が構築されました。

上下2つの平坦地からは、現在までに掘立柱建物11棟を確認しています。建物は同じ場所で何度か建て替えられており、繰り返し同じ場所で生活していたことが判明しました(写真3)。調査区内からは、当時の日常品であった珠洲焼(石川県産)や瀬戸美濃焼(東海地方産)、青磁・白磁(中国産)、土師器、瓦器、砥石などが出土しており、当時の生活の一端をうかがうことができます。

(株)古田組 相羽重徳)



写真1 遺跡全景



写真2 石垣の断面



写真3 鎌倉時代の掘立柱建物

## 須沢角地遺跡

(糸魚川市須沢大字大坪2667番地ほか)

須沢角地遺跡は、姫川左岸の自然堤防に位置し、標高は3～5mを測ります。北陸新幹線建設に伴い平成19年9月～11月に、新幹線橋脚予定地(2・4～6区)の5地点を発掘調査しました。調査面積の合計は1,055㎡です。

検出遺構は、掘立柱建物や畑作痕と考えられる畝状小溝、土坑などが検出されています。いずれも奈良・平安時代のもと考えられ、微高地となる5～7区で集中する傾向があります。

遺物は、奈良・平安時代の土師器の甕や須恵器の杯が中心で、遺構の密集する5～7区で多く出土しています。またこれらに伴い、製塩土器や土錘、鉄滓など、当遺跡での生活の様子を示す遺物も見つかっています。

当遺跡は昭和62年の調査から、古代北陸道に設置された「滄海駅」の候補地のひとつとして、想定されています。今回の調査では、駅の存在を示す証拠は発見されていません。今後は、検出した遺構や出土遺物を詳細に検討し、古代「滄海駅」との関連を含めて、遺跡の性格を明らかにしていきたいと考えています。

(株みくに考古学研究所 長澤展生)



5区検出遺構

## 高山東遺跡

(村上市大字仲間町字高山)

高山東遺跡は、丘陵上の斜面に立地し、標高は24～29mを測ります。日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成19年5月～6月に調査を実施しました。遺構は土坑やピットなど、30基を検出しました。出土した土器から縄文時代前期中葉と中期前葉の2時期を確認しました。

遺物の中で注目されるのは、土坑(SK20)の底部から正位の状態出土した前期中葉の鉢形土器(写真2)です。深鉢と浅鉢の中間的な器形であることから、鉢形土器としました。口縁部に3単位の小突起が付き、突起の内側に刺突痕が見られます。器面には、半截竹管と呼ばれる竹を縦に割った道具で押し引きながら描いた複数の沈線が見られます。沈線には直線状のものと波状のものがあり、それぞれ横位に施されています。

この鉢形土器は、東北地方を中心に分布する大木2a式土器と考えられ、県内での出土例はほとんどなく、器形全体を知る資料としてたいへん貴重です。

(加藤建設(株) 北村和穂)



写真1 SK20遺物出土状況



写真2 SK20出土土器

## 横マクリ遺跡

(糸魚川市大字田伏字横マクリ)

横マクリ遺跡は、金山から連なる丘陵<sup>すその</sup>裾野の沖積低地に立地する遺跡で、国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成18年度から発掘調査を行っています。昨年度の調査によって、古墳時代前期後半(4世紀後半)を中心とする遺跡であることがわかっています。今年度は約1,100㎡を対象に、8月～12月まで調査を行いました。

今年度の調査では、調査区西側(昨年の調査区側)を中心に古墳時代前期の遺物が多く見つかかり、また東側を中心に平安時代(10世紀後半～11世紀頃)の遺物が見つかっています。

古墳時代の遺構は、ピットが約20基、土坑1基、溝1基などがあります。土器は壺・甕・高杯<sup>たかつき</sup>・器台<sup>きだい</sup>などがあり、赤彩品は少なく、ほとんどが日常的な器であったと考えています。また土器が集中している場所が、何か所か見つかかりました。居住の場または廃棄場であった可能性があります。石製品で注目されるのが30点以上出土した玉類の未成品で、ヒスイ製の勾玉も1点ありました。いずれも未成であることから、完成品は遺跡の外に持ち出されたものと考えられます。

平安時代の頃に居住していた痕跡は見つかっていませんが、東際に位置する自然流路内から、製塩土器などが多く見つかかりました。製塩土器は指頭大の細片に砕けているものが大半です。

古墳時代の遺物量が東に向かい徐々に少なくなっていることから、今年度の調査範囲は居住域に隣接する集落の縁辺部、もしくは作業場であった可能性があります。(石川智紀)



古墳時代の遺物出土状況

## 六反田南遺跡

(糸魚川市大和川字六反田地内)

### 整理報告遺跡

糸魚川では多様な石材が産出されることから、古くから石器・石製品の製作が盛んにおこなわれてきました。川跡から古墳時代後期の土器に伴い、「滑石」<sup>かつせき</sup>を加工した石製品が大量に出土しました。主に勾玉<sup>まがたま</sup>・管玉<sup>くだたま</sup>・白玉<sup>うすだま</sup>・石製模造品・石製紡錘車を製作していたことが、工程のわかる未製品の存在から明らかになりました。ほかに敲石<sup>たたきいし</sup>や砥石<sup>といし</sup>など製作に用いられた工具も多く出土しています。

特に紡錘車の製作工程が分かる資料は出土例が少なく、県内では糸魚川地域でのみ確認されています。紡錘車は、遠心力を利用して糸を紡ぐ道具ですが、玉類に穴をあける道具として使用された可能性もあります。

当遺跡の石製品と製作工程品のほとんどはこの川跡から出土しており、工房のような施設から運び出されて一括廃棄されたものと考えられます。今回の調査区の周辺に大規模な玉作の工房<sup>たまづくり</sup>が発見される可能性が高いと考えられます。今後の調査が注目されます。(株吉田建設 水落雅明)



紡錘車の製作工程

(原石 荒割 整形 穿孔)

## 整理報告遺跡

## 野地遺跡

(胎内市大字八幡字野地285ほか)

日本海東北自動車道の建設に伴い、平成17年度に発掘調査を実施しました。遺跡は胎内川の右岸に形成された自然堤防の後背地に立地し、海岸線からは2.6kmの距離に位置します。胎内川を渡る橋の橋脚部分が調査対象であったので、90㎡×5か所という小面積の発掘調査でしたが、縄文時代後期後半から晩期前半（約3,500～3,000年前）におよぶ長期間継続した遺跡であることが判明しました。特に、地下約2mの湿潤な土層中に遺跡がパッキされていたことから、普通の遺跡では失われてしまう木製品や漆製品が多数出土したことが注目されます。ここでは、漆利用に関連する遺物を紹介します。

縄文時代は盛んに漆が利用されました。現在、漆製品の最古例は早期（9,000年前：北海道垣ノ島B遺跡）と考えられています。野地遺跡から出土した漆関連遺物で特に注目されるのは、漆液から不純物を取り除くための「漆漉し布」（写真1）です。束になった糸が螺旋をなすことから、漆を漉すためにアンギン（編布）をねじった様子が良く分かります。全体が赤いのはベンガラなどの赤色顔料を含んだ漆液を漉したからでしょう。漆漉し布は全国的にも出土数が少ない貴重な資料ですが、野地遺跡では2点が確認されました。さらに、漆液を溜めた小型の壺も出土しました。漆液をなでつけた痕が壺の内面に認められ、漆汚れに付いた指紋（写真2）も確認できました。縄文時代の人々は素手で漆を取り扱っていたようです。ほかにも、漆液を調合するためのパレット（写真3）や、赤色顔料が付着した磨石などの漆器製作に関わる遺物も出土しています。

これらの資料から、野地遺跡では、漆液の保存・管理、漆液の精製・調合、塗りなどの一連の作業が行なわれていたことが分かりました。さらに、漆の木が遺跡内で出土していることから、近隣に存在した漆林から漆が採取されていたと考えられます。そして、多数の漆製品（土器・編籠・腕輪・樹皮製品・漆による土器の補修など）が発見されていることから、漆が盛んに利用される集落であったと言えるでしょう。一方、野地遺跡に隣接する同時代の遺跡では、漆製品がほとんど発見されていません。これは、遺物の保存状態の違いによるのか、あるいは遺跡の性格を反映したものなのか。今後、検討しなければならない大きな課題です。（渡邊裕之）



写真1 漆漉し布



写真2 漆容器に残された指紋



写真3 漆パレット

## 大勢の皆様が埋蔵文化財センターを訪問してくれました!

平成19年度 訪問者数 7,380名 体験活動参加 3,512名 H20.2.29 現在



大人気! 火おこし体験



黒曜石の石器を使い野菜を切る体験



職場体験で土器の接合(せつごう)に挑戦!



瓦の拓本(埋蔵文化財講座)



5,000年前の縄文土器観察!



おいしいお芋が煮えますように!



県民の皆様への発掘調査出土品解説



文様付け体験の作品(小学生)



中学生が勾玉をつくりました。



一家で火おこし!(新津 花ふるフェスタ)

新潟県埋蔵文化財センターへの訪問に関するお問い合わせは、8ページに記載している連絡先へお願いします。

## 県内の遺跡・遺物60

だいがはな  
**台ヶ鼻古墳**(昭和48年県指定)  
 (佐渡市二見字台ヶ鼻550ほか)

台ヶ鼻古墳は、明治時代に盗掘を受け、須恵器や刀や人骨が出土したようですが、現在その所在は不明です。その後、昭和36年に実施された九学会連合佐渡調査委員会による発掘調査で、石室などの概要が確認されました。その結果、平面形は、不整円形を呈した墳丘(北西 - 南東は約11m、北東 - 南西には9m)と、北東方向に開口する両袖型の横穴式石室であることが確認されました。石室は尾根の北東側斜面に入口を設け、北東 - 南西方向に主軸をもち、尾根を断ち割るよう築かれています。石室床面は、羨道(玄室への通路)から玄室(遺体を安置する部屋)まで段差がなく、ほぼ平になっています。石室の規模は全長約6.8m、残存する最大高さ約1.7mです。床には玉石が敷かれることも報告されています。また、石室内から刀(直刀)が出土していますが、詳しい出土状況は不詳です。玄室の隅に力石を用いる積み方から、側壁は上に行くに従って石室中軸方向にせり出す「持ち送り」式となっており、最後に天井石を置いて蓋をする構造になっています。



海を望む古墳と周辺の地形(南から)

佐渡に拠点築いた集団が島内で古墳を造営した初めての例であり、6世紀代に北九州地域の古墳構築技術が佐渡にもたらされたことがわかり、日本海地域の交流を考える上で重要な古墳です。

これらの古墳の特徴が、新潟県でも貴重であることから、昭和48年に新潟県指定史跡になりました。

調査後年月が経つなかで、調査時に掘ったトレンチが崩れたりして、原形を失いつつあります。また、付近には降雨を遮るような樹木が少なく、今後、崩落が進むことも懸念されました。そこで平成16年11月、佐渡市教育委員会と新潟県教育委員会が協議し、埋め戻すことで石室の劣化を止め、保存を図ることを確認しました。また埋め戻しにより古墳石室を見ることができなくなることから、現状を記録し、将来の遺跡活用及び再調査を念頭に入れて砂を直接石室内に充填しています。(資料提供：佐渡市教育委員会)



玄室から羨道をみる



玄室部の埋め戻し作業

## 埋文にいがたNo 62

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 〒956-0845 新潟市秋葉区金津  
 93番地1  
 TEL (0250) 25 - 3981  
 FAX (0250) 25 - 3986  
 e-mail : niigata@maibun.net  
 URL : http://www.maibun.net

印刷 阿部印刷株式会社